

託された手帳

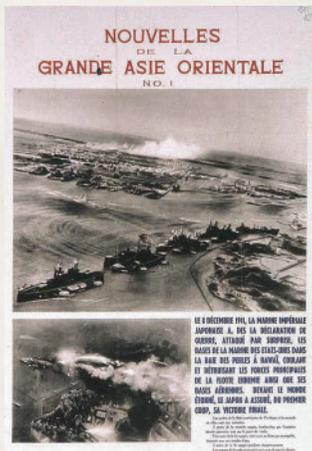
経済学部 准教授 難波ちづる なんば

かつて私はフランスで、第二次世界大戦期のフランスによるベトナム統治に関する論文に取り組んでいた。この時期のベトナムは、フランスの植民地支配下にあると同時に日本軍の占領下にもおかれ、フランス人と日本人は、この地で競合しつつ協力しあっており、その錯綜した状況に関心をもっていたのだ。ある時、同じ研究所で日本研究をしていた知り合いが相談をしてきた。彼は、昔ベトナムにいた老齢の知人からある物を託されたそうなのだ。それは、終戦直後のベトナムで、ある日本人兵士が、懇意になったそのフランス人に渡した手帳だった。日本は戦争に負け、この先どうなるかわからない。だからその手帳を、敵国人ではあるが親しくしていた彼に預けたのだという。彼はそれをずっと保管していたが、長い年月が経ち、兵士の家族に返したいと思い、その研究者に託したのだった。つまり、私に家族を探してくれ、という相談だった。

わかっているのは兵士の名前と住んでいた場所だけだった。しかも、市町村の再編によってその町はもう存在していなかった。とりあえず、再編後の役所に連絡をとってみた。するとなんと幸運にも、その兵士の子供の友人が役所に勤めていたのだ。手帳は無事に、家族のもとに届けられることになった。

しばらくして子供の一人から手紙をもらった。それによると、父親は戦後、家族のもとに帰ったのだが、数年後突然姿を消してしまったとのことだった。子供たちは、自分たちを捨てて蒸発した父親を恨み続けてきた。思いがけず受け取った手帳を開くと、そこには妻や子供たちに対する想いがあふれており、思わず涙した、とあった。私もその手帳を読んだのだが、覚書の合間に、妻への熱い想いや、子供への温かな愛情がちりばめられていた。相手に届くことを想定して書かれてはいない、素朴でむきだしという言葉は感動的ですからあった。

敗戦後の日本に戻った彼に何があったのだろうか。戦争でどんな体験をしたのだろうか。なぜそのフランス人に手帳を渡したのだろうか。今でも時々ふと思ひ出し、75年前、戦争に翻弄されつつ生きていた人々に思いを馳せる。



仏領インドシナ（ベトナム・ラオス・カンボジア）で配布された、1941年12月8日の真珠湾攻撃に関するポスター

出典：Archives nationales d'outre-mer (Aix-en-Provence), 9F423

談話室

教員によるエッセイコーナー